

EVENTS

会期中は、アートとキャリアデザインをめぐるイベントなどを多数開催！
 —参加方法はウェブサイトをご覧ください。—

6/27
[土]

14:00-16:00

オープニングイベント
「ギャラリートーク」
本展出演作家によるギャラリートーク。

16:00-

オープニングレセプション
アートと食をテーマに活動する
グループによるケータリング合戦!

7/4
[土]

14:00-16:00

トークイベント
中村牧子 + 渡里久美子
(ファッションデザイナー/
migh-T BY KUMIKO WATARI)

ロンドン留学を経て、国内外で活動する
2人のクリエイターによる対談イベント!
migh-T BY KUMIKO WATARIの
ポップアップショップもオープン!

7/11
[土]

14:00-16:00

トークイベント
「芸大卒女子の
お仕事ミーティング」

「アーティスト」以外の職業を選択した
京都市立芸術大学の
卒業生によるトークイベント。
司会:とんぼせんせい(イラストレーター)

7/20
[月・祝]

時間未定
イベント

「木藤純子展示空間内
パフォーマンス」

木藤純子の作品展示空間にて、
海の日1日限りの
パフォーマンスを行います。

7/26
[日]

14:00-16:00

トークイベント
「アートと子育て」

アーティストや美術関係者による
子育てにまつわる座談会。

登壇者:東明(アーティスト)、フジタ(アーティスト)
西尾咲子(京都芸術センター アートコーディネーター)
司会:小山田徹(京都市立芸術大学美術学部教授)

8/2
[日]

時間未定

クロージング
イベント

曾谷朝絵展示空間内にて、
山根明季子(作曲家)による
パフォーマンスを予定。

<http://gallery.kcua.ac.jp/>

その他にも多数のイベントを予定しています。最新情報はギャラリー@KCUAのウェブサイトにて随時公開致します。



京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
〒604-0052
京都市中京区押小路町238-1
tel:075-253-1509

- 京都市営地下鉄
「二条城前」駅(2番出口)南東へ徒歩約8分
- 京都市営バス
「堀川御池」バス停下車すぐ

@KCUA
Kyoto City University of Arts Gallery

木藤純子 曾谷朝絵 中村牧子 和田真由子

2015年6月27日[土]—8月2日[日]

京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA
(@KCUA 1,2, Gallery A,B,C) 入場無料

11:00-19:00 最終入館は18:30まで 月曜休館 7月20日[月・祝]は開館、翌7月21日[火]を休館

企画:京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA 主催:京都市立芸術大学 助成:芸術文化振興基金、公益財団法人野村財団
協力:!.TOON Ltd、株式会社アダチ、今井敏二、有限会社榎田屋染工場、京都市立芸術大学キャリアデザインセンター、神戸アートビレッジセンター、
児玉画廊、Stance Company Ltd.、東京芸術大学大学院映像研究科アニメーション専攻伊藤有彦研究室、中嶋午郎、西村画廊、
株式会社フィリップス エレクトロニクス ジャパン、株式会社ホースケアプロダクツ、前田賢一、Masafumi Morimoto、山岡信貴

@KCUA
京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts

NOMURA 野村財団
UETAYA PHILIPS

among those intangible...

と ち ゃ ん 水 白
ま れ 面 が
る に

アートと
キャリアデザインを
めぐるイベントなど
も多数開催!

<http://gallery.kcua.ac.jp/>

木藤純子

JUNKO KIDO



1.2
「ひるとよる」展示風景
(2014, GALLERY CAPTION, 岐阜)
撮影:先岡康博

1976年富山県生まれ。
1999年成安造形大学造形学部造形美術科洋画クラス卒業。
京都府在住。
主な個展に「ひるとよる」
(2014, GALLERY CAPTION, 岐阜)、
注目作家紹介プログラム チャンネル5「Winter Bloom」
(2014, 兵庫県立美術館、兵庫)など。
主なグループ展に、
「panorama—すべてを見ながら、見えていない私たちへ」
(2010, 京都芸術センター、京都)、
「世界制作の方法」(2011, 国立国際美術館、大阪)、
MOTアニュアル2011
「Nearest Faraway 世界の深さのはかり方」
(2011, 東京都現代美術館、東京)、
「岡崎 ART & JAZZ 2012 “親密な空間・私の記憶”」
(2012, 岡崎市日本多忠次邸、愛知)、
「自然学 | SHIZENGAKU 一来るべき美学のために—」
(2012, 滋賀県立近代美術館、滋賀)、
「NOW●JAPAN」
(2013, KAdE, オランダ)など。



2

曾谷朝絵
ASAE SOYA
1982年東京都生まれ。2006年東京藝術大学大学院美術研究科博士課程修了にて博士(美術)取得。神奈川県在住。
「昭和シェル石油現代美術賞」グランプリ(2001)、「VOCA賞」特別賞(VOCA賞(グランプリ)(2002)、「横浜文化賞文化・芸術奨励賞」(2013)、「神奈川県文化賞・スポンサー賞」(神奈川県文化賞未来賞(2013)、「NYO Dot Art Community Commission」(2014)ほか、受賞多数。
平成25年度文化庁新進芸術家在外研修員としてニューヨークに滞在。
主な個展として「虹」(2015, AKI Gallery, 台北)、「浮かぶ」(2014, KAAAT 神奈川県芸術劇場、神奈川県)、
「藍色(そらいろ)」(2013, 水戸芸術館、茨城)、
「雫も色」(2010, SHISEIDO GALLERY, 東京)、「Prism」(2007, 西村画廊、東京)など多数。
グループ展として「聯覺」(Synesthesia)(2014, AKI Gallery, 台北)、「Art Today 2005」(2005, セゾン現代美術館、長野)、「こもろび屋」(2003, 水戸芸術館、茨城)、「第1回 府中ピエンナーレ-ダブルリアリティ」(2002, 府中市美術館、東京)など多数。



3



4

3 《雫(sora)》(2013, 水戸芸術館、茨城)
撮影:ナカサンド・パートナーズ
4 《Splash》パブリックビューイング「浮かぶ」
(2014, KAAAT 神奈川県芸術劇場、神奈川県)
撮影:KAAAT 神奈川県芸術劇場

京都市立芸術大学に在籍する学生のうち、女子学生が占める割合は増加し続けていて、もはや9割に近づきつつあります。全国的に見ても、程度の差はしかし現在、女性のアーティストが顕著に増加しているわけではありません。では、芸術大学を卒業した女性たちは何を目指し、どこへ向かおうとしているのか。今夏、この問いを起点として、芸術大学を卒業した女性たちが手がけているプロジェクト「目が水面(みなも)にゆれるとき」を立ち上げます。

目が水面にゆれるとき

このように、本展出展作家の4人は、日常の中で見過ごしてしまいがちなものを自らの身体感覚でとらえ、それぞれの手法で作品に落としこんでいます。目だけでは存在している何かもまた、現実の世界を構成する要素であるはずでず。「いま」の見えざる断片を展開してゆくのです。かつてパウル・クレーは「芸術の見えるようにすることである」との言葉を残しましたが、彼女たちはいま、まさに芸術の本質を見据えているのだと言えましよう。

また、国内外で広く活躍中の本プロジェクトの出展中心に、それぞれの「いま」をテーマに各種イベントを「アート」をキーワードとして、アーティストとして活動する人たちによるトークイベントなどを行います。これらの「いま」に触れることは、参加者も含めたその場に立ち会う人それぞれの「いま」を改めてとらえ直す機会になるのではないのでしょうか。

「鏡花水月」という言葉があります。これは、鏡に映った花や、水に映った月を指す言葉ですが、転じて、目には見えながら手に取ることでできないもの、あるいは感じ取れても言い表すことのできないものを形容しています。はかない幻のたとえ、と定義されることが多いのですが、その言葉にはもっと奥深い趣があるのではないのでしょうか。本プロジェクトで取り上げる女性たち、そして現在に生きる私たちの全ては「目には見えながら手に取ることでできないもの、あるいは感じ取れても言い表すことのできないもの」と向き合いながら、それぞれの「いま」を形作っています。

この、色とりどりの水面に映る月の影がゆらめくとき、日常の中で見過ごしてしまいがちだけれど、確かに存在する本質的なものに出会えるはずでず。そして、その中に、未来に向きあうためのヒントを見つけることができるかもしれません。展覧会とイベントの両方とも、多くの方のご参加をお待ちしています。

生が占める割合は増加し続けていて、もはや9割はあれ、どの芸術大学にもその傾向があるようです。いるわけではありません。では、芸術大学を卒業した女性たちの「いま」をめぐる展覧会とイベントで構成を立ち上げます。

谷朝絵・中村牧子・和田真由子の作品を紹介し、読み解いた「場」の持つ力を利用し、鑑賞者の感性を揺さぶります。鎌倉朝絵は、日常の中にある身近なものをモチーフに発色染料で表現してきましたが、近年は平面絵画のみならずインスタレーションにもその世界交錯」をキーワードに陶磁器作品を制作し、近年の美的感覚を、西洋のモチーフを引用しながら作品上で融合させるシリーズを手がけています。そして、和田真由子は、イメージや意識、思考といった実体を持たないものを可視化するため、形を限定しな



5 100years after the party-plate—(2011)
6 swan lake (2011)



1982年大阪府生まれ。
2009年京都市立芸術大学大学院美術研究科陶磁器専攻修了。
2011年Royal College of Art(英国王立芸術大学) Ceramics&Glass科卒業。
ドイツ在住。
主な展覧会に「裝飾の力」(2009, 東京藝術大学美術館工芸館、東京)、「フシギ!たのしい!ケンダイトーゲイ」(2012, 京都市立美術館、京橋)、「CERAMIQUE 1」(2013, KISSTHEDESIGN GALLERY, ロンドン)など。
「日常と非日常の交錯」をテーマにした陶芸作品を国内外で発表している。

7 《馬》(2011) 撮影:橋本一夫
8 《ツバメ》(2011) Courtesy:児玉画廊



7



8

和田真由子

MAYUKO WADA

過ごしてしまいがちなものを自らの身体感覚でとらえることのできるものだけで世界を構築することはできません。この4人が表現するような、不可視だけれど存在している何かもまた、現実の世界を構成とらえ、追求することで、彼女たちの作品世界は展開本質は、見えるものをそのまま再現するのではなく、彼女たちはいま、まさに芸術の本質を見据えているのだと言えましよう。

作家に加え、京都市立芸術大学の卒業生たちを中心に、それぞれの「いま」をテーマに各種イベントを実施します。たとえば、「芸術大学で学んだもの=することを選択せず、慣れたさまざまな職業に従事する人たちによるトークイベントなどを行います。これらの「いま」に触れることは、参加者も含めたその場に立ち会う人それぞれの「いま」を改めてとらえ直す機会になるのではないのでしょうか。

「鏡花水月」という言葉があります。これは、鏡に映った花や、水に映った月を指す言葉ですが、転じて、目には見えながら手に取ることでできないもの、あるいは感じ取れても言い表すことのできないものを形容しています。はかない幻のたとえ、と定義されることが多いのですが、その言葉にはもっと奥深い趣があるのではないのでしょうか。本プロジェクトで取り上げる女性たち、そして現在に生きる私たちの全ては「目には見えながら手に取ることでできないもの、あるいは感じ取れても言い表すことのできないもの」と向き合いながら、それぞれの「いま」を形作っています。

この、色とりどりの水面に映る月の影がゆらめくとき、日常の中で見過ごしてしまいがちだけれど、確かに存在する本質的なものに出会えるはずでず。そして、その中に、未来に向きあうためのヒントを見つけることができるかもしれません。展覧会とイベントの両方とも、多くの方のご参加をお待ちしています。

1985年大阪府生まれ。2011年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻修了。
大阪府在住。個展に「ヨットの習作」(2010, 児玉画廊、京都)、「フローイングの海」(2011, 児玉画廊、京都)、「矢のための海」(2013, 児玉画廊 | 東京、東京)、「ファサード」(2013, 児玉画廊、京都)、「母親と観音」(2014, 児玉画廊、京都)、「ハムレット」(2015, 児玉画廊 | 東京、東京)。
主なグループ展に「アル・ジャパネスク:世界の中の日本現代美術」(2012, 国立国際美術館、大阪)、「キュレーターからのメッセージ2012「現代絵画のいま」(2012, 兵庫県立美術館、兵庫)、「VOCA賞」(2013, 上野の森美術館、東京)など。